

・砂糖竈・土坑などを検出しており、そのほかの調査区では柱穴を数基検出しているだけである。土層的には調査区全面において耕土直下に厚さ1m弱の砂礫層が堆積しており、標高はG5区で約13.8m、G4区で約13.3mと両調査区では0.5m程の高低差が認められる。この砂礫層上面で近世の遺構を検出しているが、遺構の粗密は遺構検出標高の差によるものと考えられる。

砂糖竈 G5区中央部、標高約13.8mで検出した二連式の砂糖竈で、後世の削平により上部が壊れているもののその構造が解る資料である。竈の構造は前から作業スペース・焚き口部・竈部からなる。作業スペースは平面形態が左右に長い歪な長方形を呈しており、規模は幅約3m、奥行約1.6m、奥部で深さ0.3mを測る。手前から奥部（焚き口部）にかけて傾斜しており、全面に焚き口部から掻き出した炭が床面に薄く堆積していた。焚き口部の構造は前部がやや窪み燃焼部とし、燃焼部から焼成室への焰道は残存する天井部から幅・高さ共約0.2m程度の規模であることが解る。焚き口部から竈部焼成室にかけては向かって左側が幅約0.25m、奥行約1m、現存高約0.2mを測り、右側が幅約0.3m、奥行約1.1m、現存高約0.2mを測る。共に側壁には方柱状の石材を使用し、長辺を内側、短辺を直列状に2～3石、現存1段に配し、奥壁は右側のみ石を1段使用し、左側は粘土で造られている。奥壁に煙道は確認していない。焰道部床面はベース層が礫層ということもあり、粘土を厚さ2～4cm程度貼っている。両者とも床面・側面・奥面に被熱の痕跡が認められる。規模及び奥壁の構造に若干の差が認められるのは、炊き釜とより高温に仕上げる揚げ釜の使用目的の違いと考えられる。また上屋構造については周辺で柱穴を確認しているが、検証できていない。

時期は幕末から明治にかけてのものと考えられる。

砂糖竈は平成10年度に四国横断自動車道建設に伴い発掘調査を実施した大内町金毘羅山遺跡で1基・原間遺跡で4基、今年度は大内町三殿出口遺跡で3基検出されている。東讃では江戸時代後期より砂糖きびから白下糖づくりが盛んに行われており、これらの砂糖竈はそれを裏付ける資料になるものである。

(3) まとめ

成重遺跡G3～8区の発掘調査の結果、近世・弥生時代後期・中期の遺構を検出した。

近世ではG5区を中心に砂糖竈・柱穴を検出し、幕末から明治にかけての讃岐の特産であった「砂糖」醸造を裏付けるものであった。

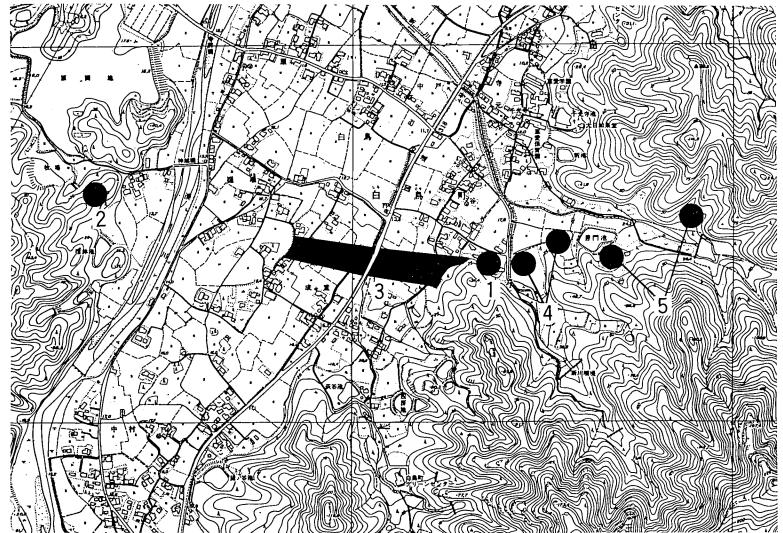
弥生時代後期では成重遺跡の当該期の集落の西端を確認し、集落の縁辺部に集石状遺構が分布することが判明した。また、弥生時代後期の集石状遺構（G4集石状遺構1、G5集石状遺構1）はそれを構成する土器と石では圧倒的に土器が多く、そのほとんどが破片であること・平面的に広がりを見ることなどから集落で不要になったものの廃棄遺構ではないかと考えられる。一方弥生時代中期においても集落の西端部で、やはり縁辺部に集石状遺構を4基検出している。しかし、これらの集石状遺構は後期のものと違い、規模は1～2mと小さいもののほとんど土器を含まず、石のみで構成されている。またやや盛り上がりをもっており、中央に柱穴や立石を配するものもみられた。

今年度の調査で検出した集石状遺構は、現在調査中のG7区の2基も含めると、計9基となる。遺構面（検出面）及び所属時期で後期と中期に分けられ、集石構造でも違いが認められた。弥生時代後期のものは廃棄遺構と考えられ、弥生時代中期のものは、ほぼ中央部の立石及び柱穴から明らかに人為的なもので、人為的な行為の結果、形造られたモニュメントではないかという結論に至った。しかし、この結論は漠然としており、今後検討課題となった。

谷 遺 跡

1. 立地と環境

谷遺跡は大川郡白鳥町字谷1096番地外に所在する。遺跡は東側を流れる湊川水系新川流域の谷地形が土石流等により埋積した地形に立地している。そのため現地表面から遺構面までの深度は深く、特に南部の山裾部では3 m以上を測る箇所もある。遺構面はほぼ調査区全域にわたって2面確認される。近年、周辺地域でも四国横断自動車道建設（津田～引田間）に伴う発掘調査が進み、東方には弥生時代から古墳時代にかけての集落跡を中心とする善門池西遺跡、弥生時代中期の大集落跡を中心とする池の奥遺跡の存在が、西方には弥生時代中期の集石墓等の墳墓を中心とする成重遺跡、弥生時代の一大墓域であった槌端遺跡の存在が明らかとなっている。特に成重遺跡においては居住遺構と埋葬遺構が共存しており、この地域における集落のあり方を考える上で多くの知見を提供している。なお、今年度の調査区には含まれないが、南部の山の斜面部には近世の窯跡が存在することが知られており本遺跡との関連が期待される所である。



1. 谷遺跡 2. 槌端遺跡 3. 成重遺跡
4. 善門池西遺跡 5. 池の奥遺跡

2. 調査の成果

調査対象面積2,641㎡を3つの調査区に分割して調査を行っている。現在、調査が終了しているI区及びII区の第1遺構面について概要を報告する。遺跡は大局的には南側の丘陵の裾部と新川の氾濫原からなり、南から北へ緩やかに傾斜している。遺構面は2面あり、第1遺構面では中世の、第2遺構面では弥生時代中期と中世の遺構を検出している。第1遺構面とその包含層は厚さ80cmほどの洪水砂で覆われていた。

また、I区南側の丘陵部には丘陵斜面に構築された近世窯が存在し、その調査にも一部着手している。

第62図 遺跡の位置及び周辺の遺跡（1/200,000）



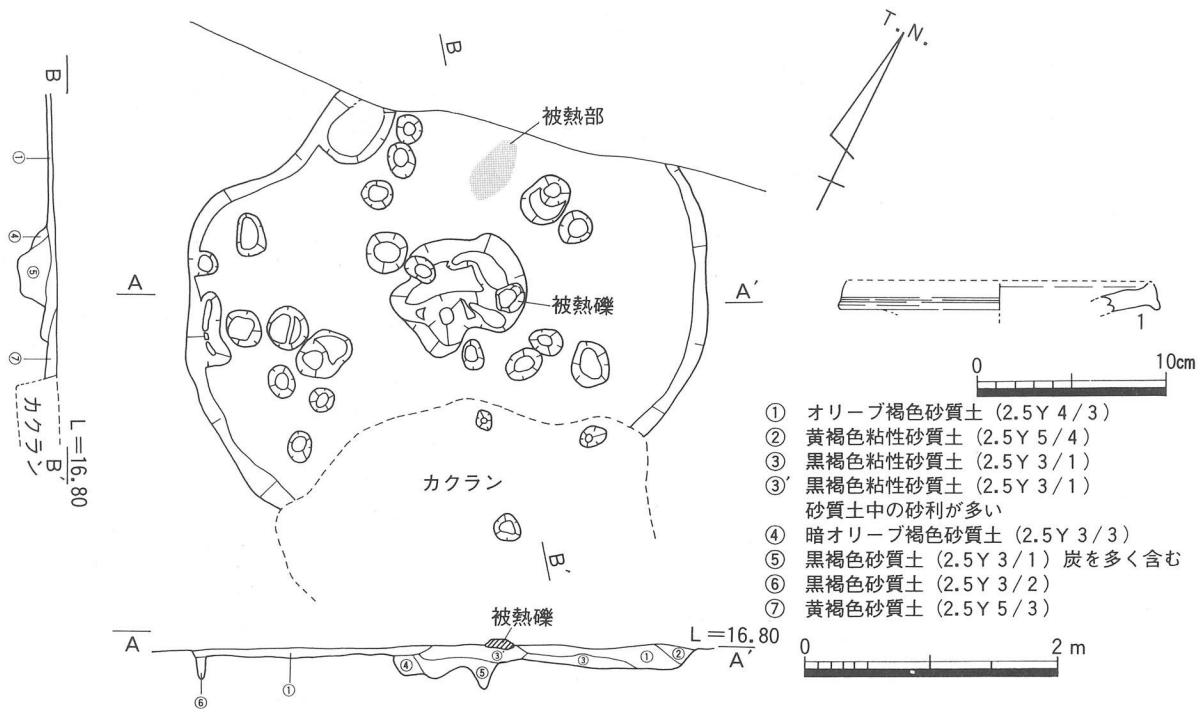
第63図 調査区割図（1/500）

I区第2遺構面SH01 調査区北部で検出した円形の竪穴住居である。北側は調査区外にあり、南側は攪乱で壊されている。直径4.1m、深さ6~18cmを測る。床面には20基のピットを検出した。直径1.5mの円周上に並ぶ柱穴が支柱穴にあたと想定できる。中央部には東西1.1m、南北0.9mを測る中央土坑があり、埋土は炭を多く含んでいる。また北西部では地山削り出しによるベッド状遺構がある。幅は40cmほどあるが、検出面からの掘り込みが浅いため平面プランでは決れた部分として検出した。遺物は極少量出土している。1は壺の口縁部である。凹線文を施しており、時期は弥生時代中期後半である。



写真50 I区 SH01 完掘状況 (西から)

1は壺の口縁部である。凹線文を施しており、時期は弥生時代中期後半である。



第64図 I区 SH01 平・断面図 (1/60)

I区第2遺構面SH02 調査区北部で検出した円形の竪穴住居で、SH01の南東2mほどの所に隣接してある。西側は攪乱により壊されているが、直径は4.5m、深さ8~10cmを測る。床面では11基のピット、炉と考えられる中央土坑1基、性格不明の土坑1基を検出している。また、北側で地山削り出しによるベッド状遺構を構築している。遺物は極少量だが、中央土坑等から出土している。ここには図化していないが、壺の口縁部や高杯の脚部があり、これらの遺物からSH02の時期は弥生時代中期後半であると考えられる。

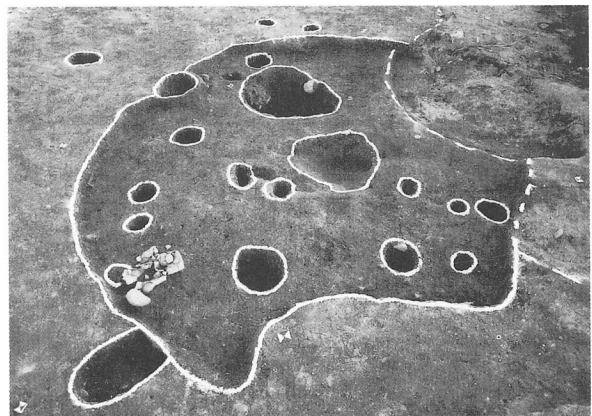


写真51 I区 SH02 完掘状況 (東から)

Ⅱ区第1遺構面S P 01 調査区の北西部で検出した不整形形のピットである。径40cm、深さ20cmを測る。土師器の杯は重ねられた状態で、3枚出土している。これらは中央へ向かって傾いていた。土層の観察により、杯の下部には砂が堆積しており、さらにこの砂はピットの外に延びていることが確認できた。おそらく樹根等による攪乱の痕跡であり、本来は底部を水平にしていたものと思われる。また、その南側に同じレベルで洪武通宝1枚も見つかっている。1

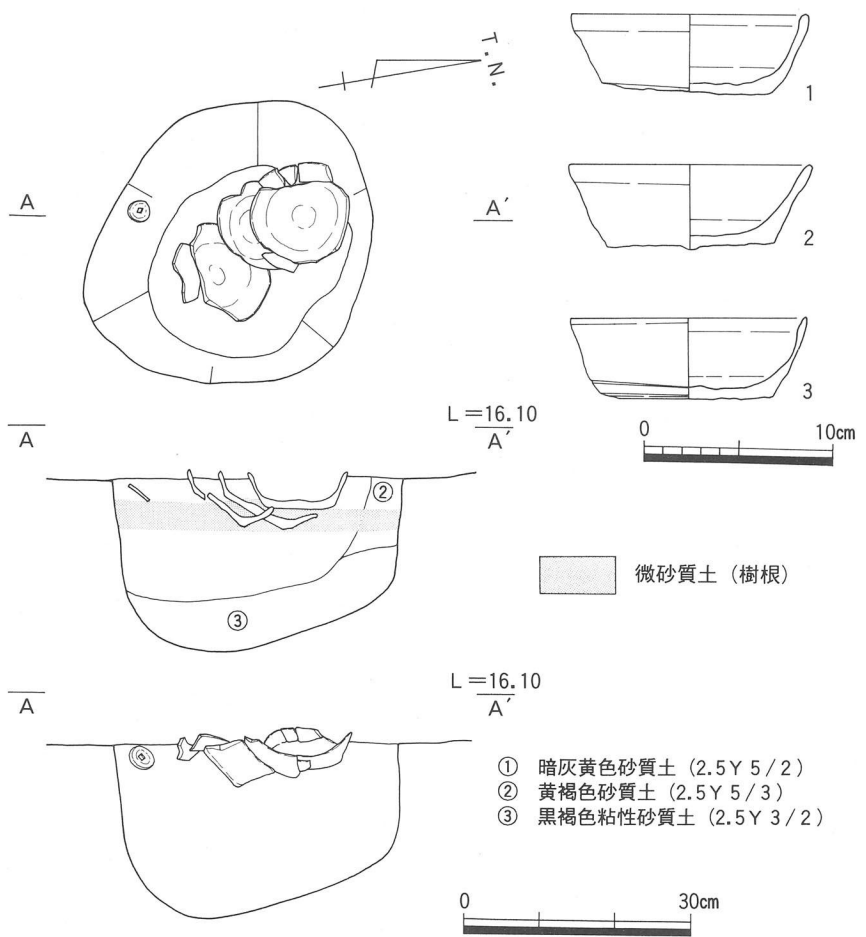


~3は口径が13cm、器高が4.5cmほどであり、画一した法量をもつ。また、全て器形は箱形を呈し、底部はヘラ切りされている。

写真52 Ⅱ区 S P 01 土器出土状況 (東から)

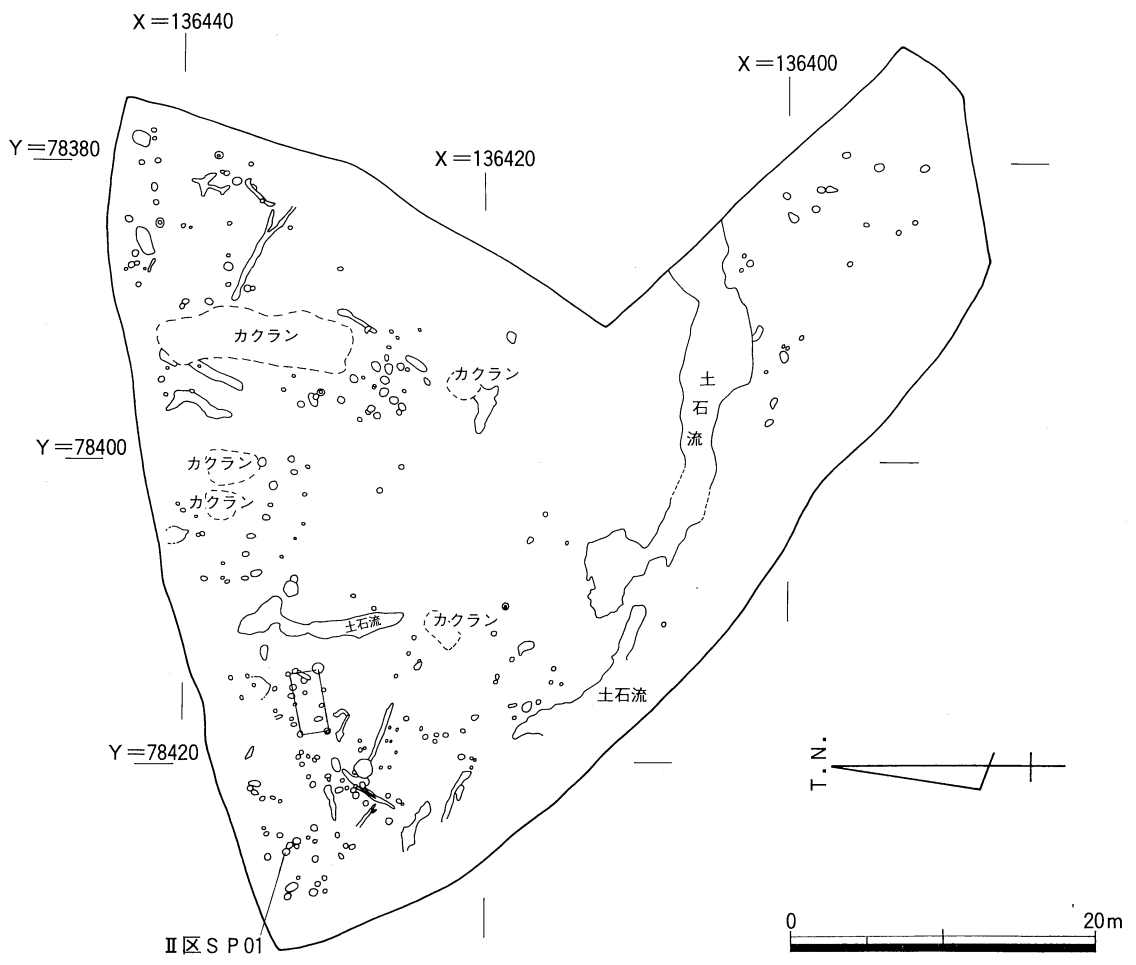
3. まとめ

谷遺跡では遺構面を2面確認した。第1遺構面では中世の掘立柱建物1棟、ピット、土坑、溝状遺構等を、第2遺構面では弥生時代中期の竪穴住居2棟、ピット、土坑等を検出している。第2遺構面では弥生時代と中世の遺構を同一遺構面で検出したが、確実な弥生時代の遺構は2棟の竪穴住居のみであり、その深さは6~18cmしかなく、著しい削平を受けている。一方、出土遺物と埋土から確実な中世のピットは深さ20~50cmほどあり、削平を受けているとし

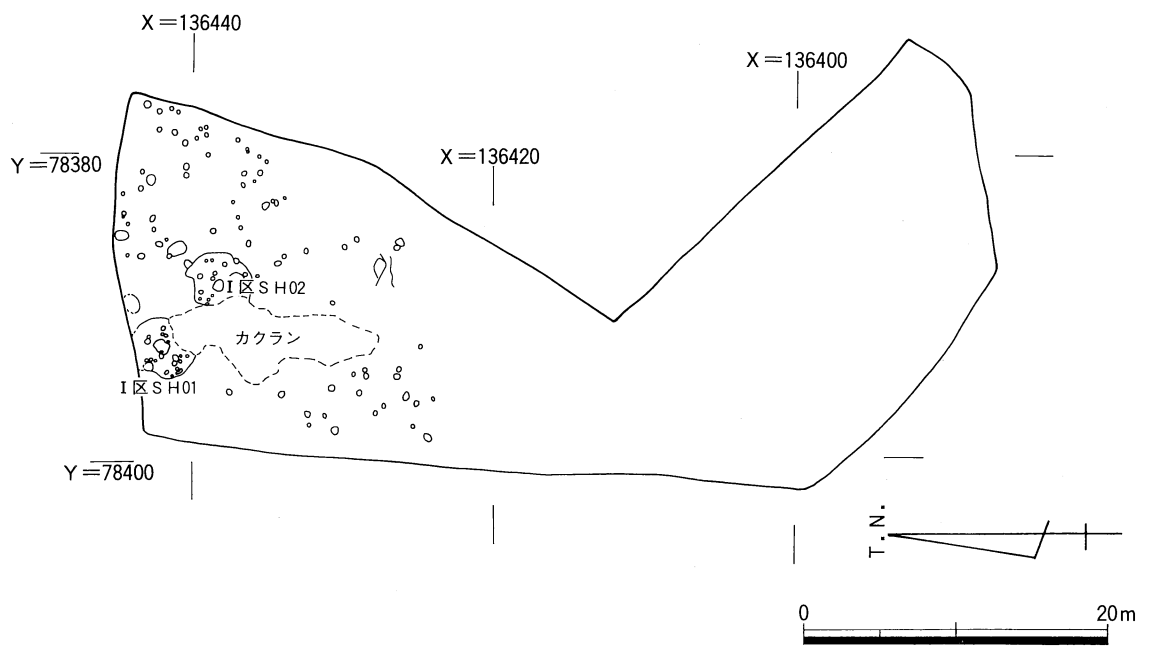


第65図 Ⅱ区 S P 01 平・立・断面図 (1/10)

てもその程度は少ない。よって、2棟の竪穴住居は第2遺構面で中世の遺構が営まれていた時期ないしは、それ以前に削平を受けていると考えられ、第2遺構面も中世の遺構面であると考えている。



I・II区 第1遺構面



I区 第2遺構面

第66図 遺構配置図 (1/500)

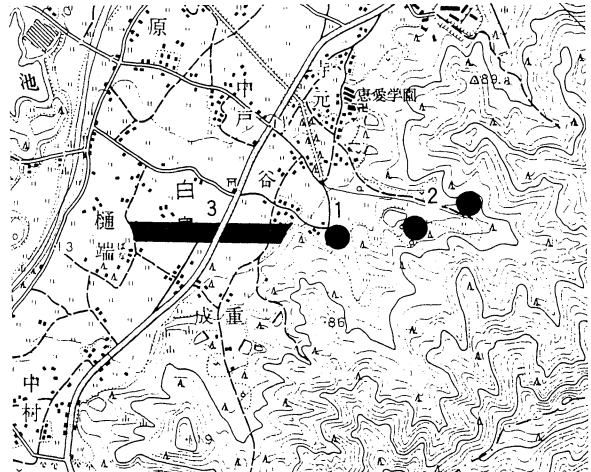
善門池西遺跡

1. 立地と環境

善門池西遺跡は大川郡白鳥町白鳥谷に所在する。

湊川水系新川の東岸に位置しており、小規模の尾根に挟まれた谷地形に立地している。本遺跡は一昨年度からの継続調査であり、弥生・古墳時代及び中世・近世の遺跡であることが判明している。

周辺の遺跡としては、弥生時代中期の集落を中心とする池の奥遺跡が東側の谷部に隣接し、西側には弥生時代から中世にかけての集落遺構を伴う成重遺跡が存在する。



1. 善門池西遺跡 2. 池の奥遺跡 3. 成重遺跡

2. 調査成果

第67図 遺跡位置及び周辺遺跡 (1/20,000)

本年度調査は一昨年度からの継続調査であることから、昨年までの地区名を踏襲して調査を実施した。調査対象地は1,050㎡で、調査区東丘陵部をⅣ区、平坦部をⅧ区とした。

Ⅳ区は標高約27mの丘陵部で、頂部に250㎡くらいの平坦面があり、古代・中世の住居の可能性があると見て、調査対象地となった。本調査の結果、混入と思われる弥生土器片・中世土器片が数片見つかったが、確実な遺構と思われるものは皆無であった。従って報告はⅧ区のみとする。

また、Ⅷ区も土層確認の結果、耕作土直下に厚い洪水砂層の堆積があり、その上面で中世の遺構面を検出したのみとなった。洪水砂層の下部は下層確認を行ったが、明確な遺構面は検出できなかった。

(1) 中世

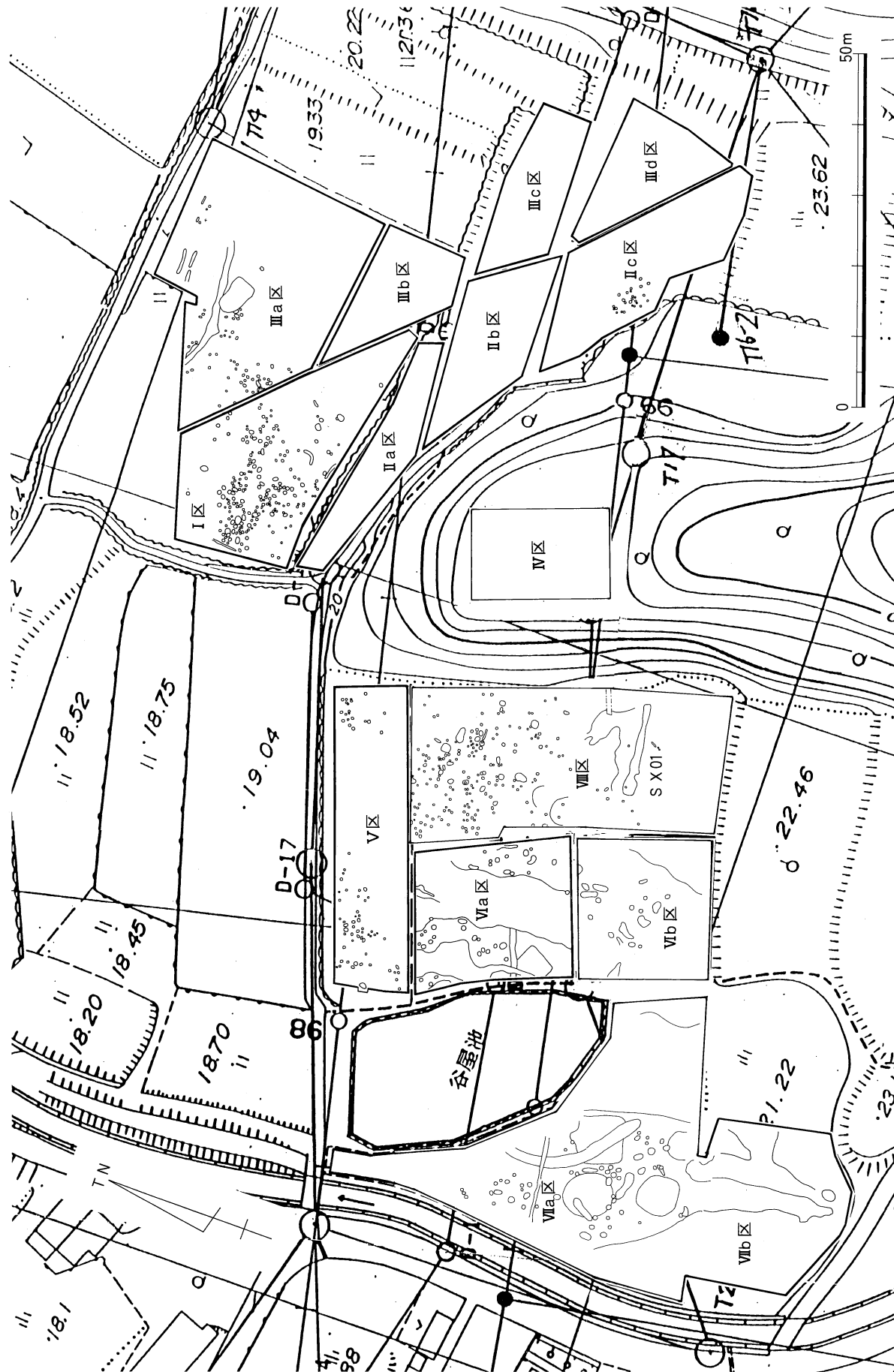
Ⅷ区の現地形は、南から北にかけて緩やかに傾斜しており、調査前までは水田耕作のために、4筆分の水田が大きく南側2筆分と北側2筆分で階段状になっていた。谷奥部より北側に向かって何層もの洪水砂層が堆積しており、洪水砂層の直上に安定した遺構面がみられ、遺構が検出できた。

主な遺構としては、不明遺構1、土坑4、柱穴多数である。

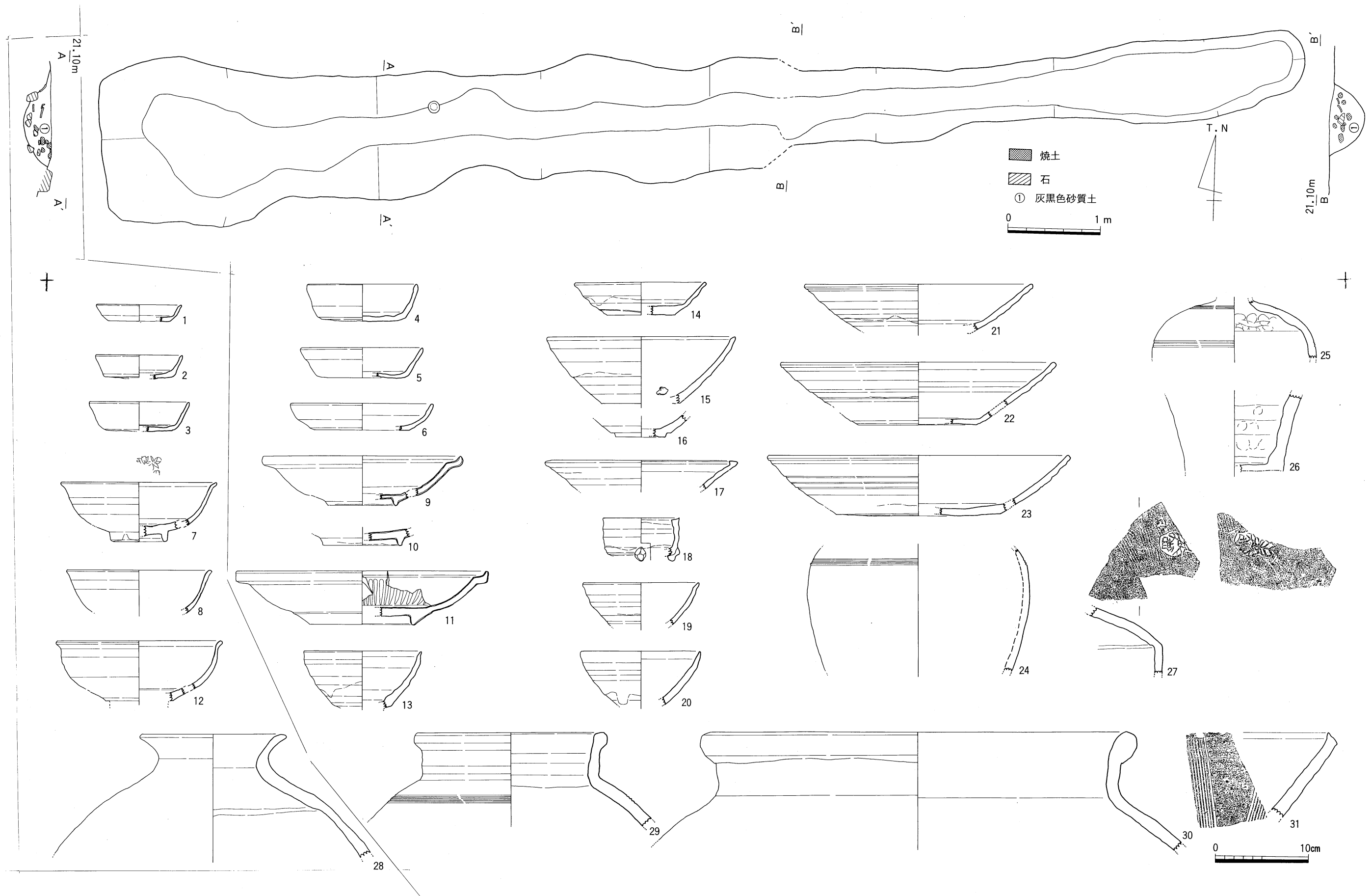
S X 01 Ⅷ区南部で検出した不明遺構である。検出長約13m、幅約0.8～2m、深さ約0.3～0.5mの溝状を呈した遺構で、断面は浅い皿状を呈している。埋土はほぼ一層で、灰黒色の埋土の中に、赤褐色の焼土ブロックと中世陶磁器片が多数混入していた。焼土塊は細かく観察すると面を持った部分や焼土内には長さ約4～5cmの藁片が含まれており、壁土の焼けたものと考えられる。

1～31はS X 01出土遺物である。1は土師器小皿、2～6は土師器杯である。7～11は青磁で、7・8は椀、9～11は盤である。12は白磁、13は中国産天目茶碗である。14～26は古瀬戸である。14は縁釉小皿、15・16は平椀、17はおろし皿、18は筒型香炉、19は灰釉天目茶碗、20は鉄釉天目茶碗、21～23は直縁大皿、24は灰釉四耳壺、25・26は瓶子である。27は産地不明陶器で、肩部に刻印がある。28は丹波焼壺である。29～31は備前焼で、29は壺、30は大甕、31は摺鉢である。

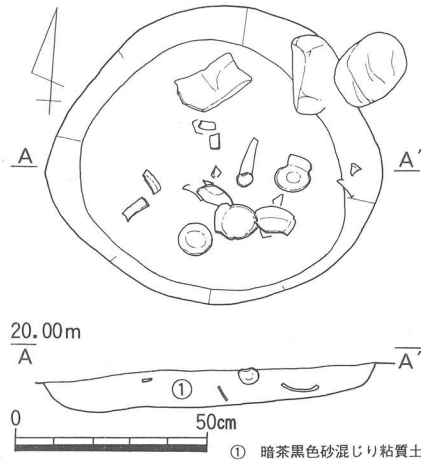
時期は14世紀頃である。焼失したと思われる家屋の壁土と陶磁器等をS X 01内に一括して捨てたものと思われる。



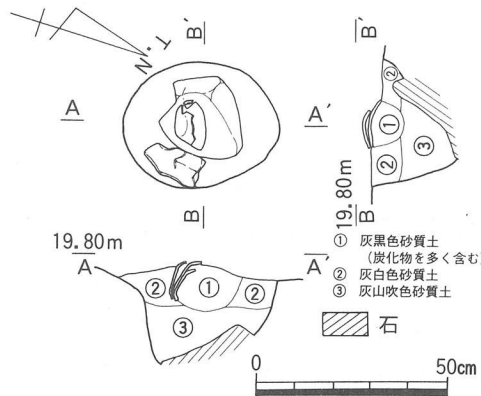
第68図 調査区割図及び遺構配置図 (1/800)



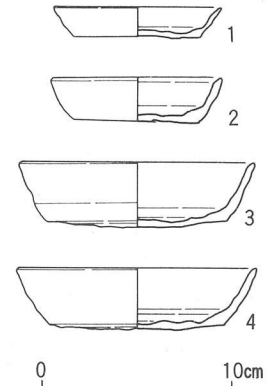
第69図 VIII区 S X 01 平・断面図及び出土遺物実測図



第70図 VIII区 S K01平・断面図



第71図 VIII区 S P03平・断面図



第72図VIII区 S P03
出土遺物実測図

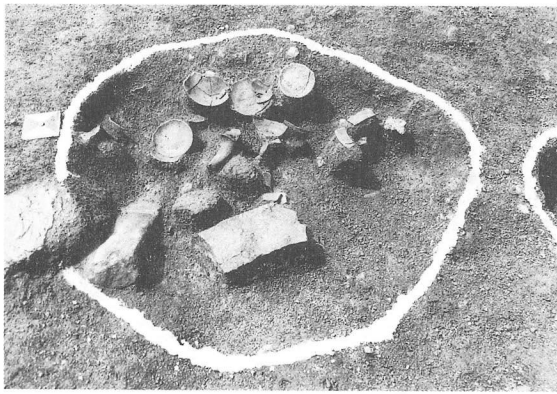


写真53 VIII区 S K01 (北から)



写真54 VIII区 S P03 (南から)

S K01 VIII区の中央部山際で見つかった土坑で、平面形態はほぼ円形を呈し、規模は直径約80～90cm、深さは約10cmを測る。土坑内から底面へら切りの土師器杯が4～5個体、土鍋の脚などが出土している。埋土は暗茶黒色砂混じり粘質土の単層である。

S P03 VIII区の中央部北側で検出した柱穴で、土師器の杯が4枚重ねられた状態で出土した。平面形態は円形で、規模は長径約40cm、短径約30cm、深さ約25cmを測る。底面には、根石と思われる石が敷かれていた。土師器の杯は、根石から10数cm浮いた状態で検出した。杯は4枚が密着し、体部を上下にした状態で重ねられており、一番内と二番目の間に炭化物を確認した。

1・2は土師器小皿、3・4は土師器杯で、底部は全てへら切りである。

S P03を中心として、建物が構成できないため、現在のところ、地鎮のための遺構と考えている。

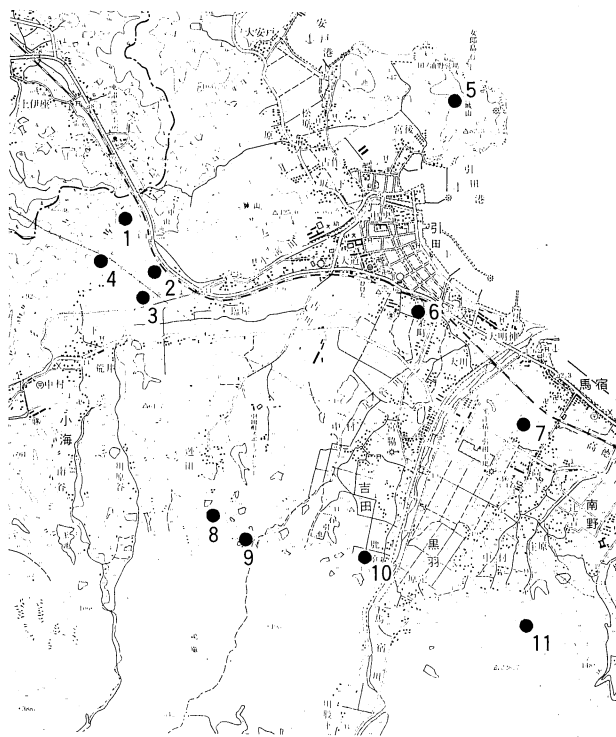
3. まとめ

発掘調査の結果、本年度の調査地には、新川の旧流路による洪水砂層がかなり堆積しており、特に東端の山際にかかなり深い落ち込みが確認できた。また、以前の調査の結果から中世以前はかなり不安定な場所であったにもかかわらず、連綿と弥生時代から中世にかけての集落が営まれていることが確認できた。今後成重遺跡も含めてこの地域の集落の造営基盤、立地について考えるのに重要な資料と考えられる。また、VIII区南側で見つかったS X01は溝状の不明遺構であるが、焼土や炭混じりの埋土の中に多数の陶磁器片が混入されており、その種類も、青磁、白磁、備前、丹波、瀬戸等多数に及んでいる。中でもこの時期の丹波焼は香川県初で、東讃地域の流通を考えるのに貴重な資料となった。

天王谷遺跡

1. 立地と環境

天王谷遺跡遺跡は、大川郡引田町引田字中山1699番地外に所在する。遺跡は川北1号墳が所在する竜王山から東に延びる丘陵の裾部に位置し、丘陵の斜面部まで含んでいるため標高は約15.5～22.5mとかなり幅がある。本遺跡の東側に隣接する部分を昨年度調査しており、その結果、掘立柱建物を伴う中世の遺跡であることが判明している。また地域住民が所持する明治初頭のものと考えられる絵図によると、調査区内に神社が存在した可能性があり、丘陵斜面部において今回の調査で見つかった多量の近世の瓦との関連が期待される。引田町内の遺跡を概観すると、弥生時代のものとしては竪穴住居跡を検出した庵の谷遺跡が挙げられる。庵の谷遺跡では100点以上のサヌカイト製の石鏃を始めとして、多数の石器が出土しており、石器製作の場ではなかったかと考えられる。古墳時代のものとしては水田遺構を検出した沖代水田遺跡と横穴式石室を伴う円墳である川北1号墳が竜王山に現存する。古代の遺跡としては奈良時代の大型掘立柱建物を検出した川北遺跡、製塩土器が出土した馬宿畑方遺跡がある。中世のものとしては鎌倉時代の掘立柱建物跡を検出した鹿庭遺跡、池を配置した御堂跡を検出した辻田石垣遺跡等がある。近世のものとしては戦国期から江戸時代初期まで使用され、現在も石垣などが残る引田城跡がある。なお天王谷地区において縄文時代の黒曜石製の石鏃が採取されており、かなり古い時代の遺跡が存在する可能性が窺え、引田町における今後の調査が期待される。



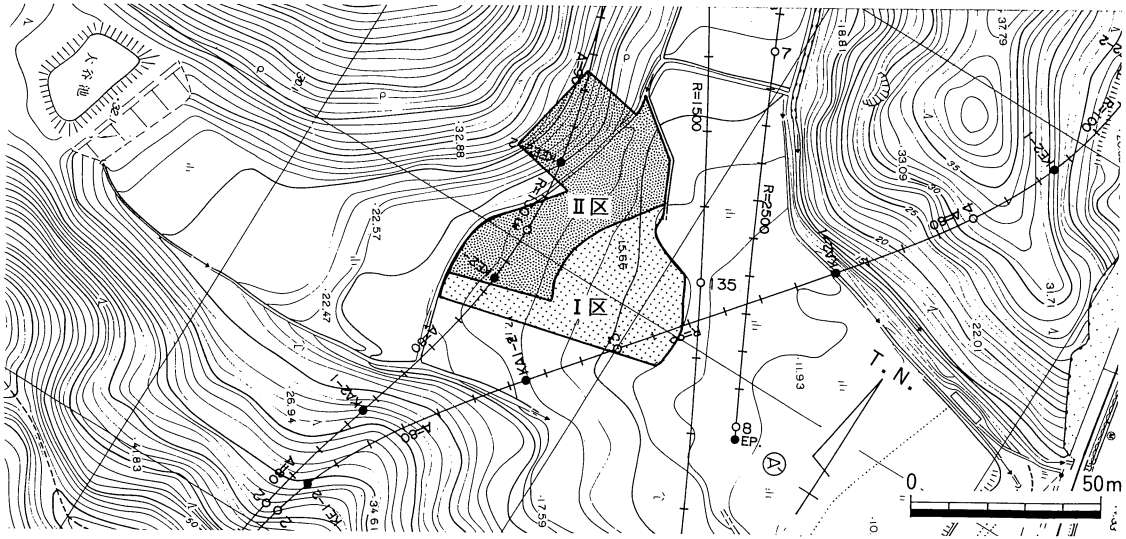
- | | |
|-----------|-------------|
| 1. 天王谷遺跡 | 7. 馬宿畑方遺跡 |
| 2. 天王谷地区 | 8. 辻田石垣遺跡 |
| 3. 川北遺跡 | 9. 辻田谷川下池遺跡 |
| 4. 川北1号墳 | 10. 鹿庭遺跡 |
| 5. 引田城跡 | 11. 庵の谷遺跡 |
| 6. 沖代水田遺跡 | |

2. 調査の成果

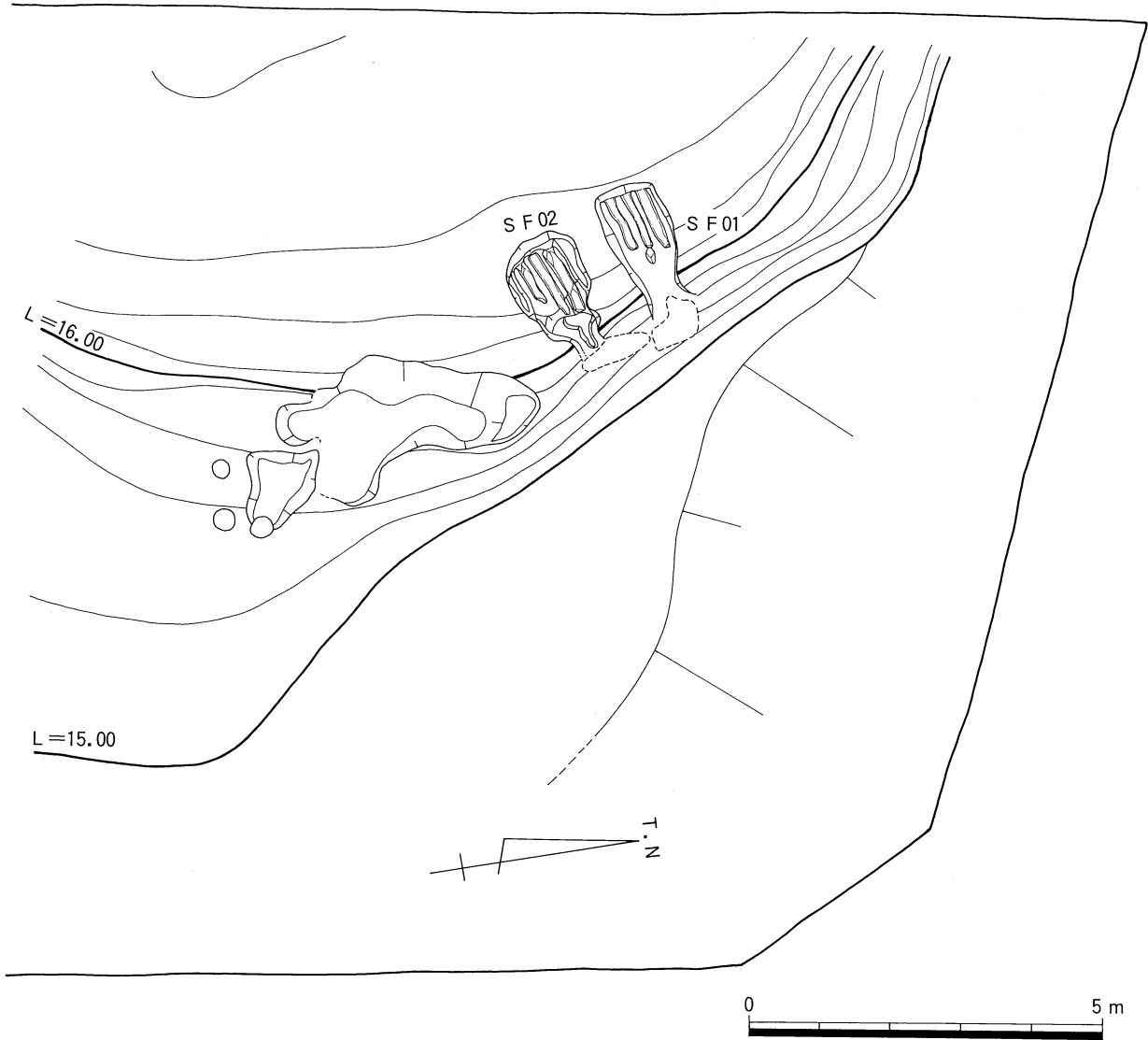
第73図 遺跡の位置及び周辺の遺跡 (1/50,000)

天王谷遺跡は昨年度からの継続調査であり、昨年度はⅠ区の調査を行い、今年度はⅡ区の調査を行った。調査区は調査対象地の東側と南端部がⅠ区、西側がⅡ区である。調査対象地を地理的に見ると、丘陵の斜面とその裾部の緩斜面、南側の深い谷地形からなる。調査区で言えば、Ⅱ区は丘陵の斜面とその裾部にある緩斜面の上位部であり、Ⅰ区はこの緩斜面の下位部と谷地形である。

Ⅰ区の調査では中世の集落を確認していたが、Ⅱ区においても緩斜面ではこの続きを検出できた。また丘陵の先端部で中世前半の瓦窯跡を2基、中腹で近世の小規模な社跡を検出した。



第74図 調査区割図 (1/1,000)



第75図 窠周辺遺構コンター図 (1/100)

S F 02

①立地 2基の窯は調査区の北西部にある丘陵の先端部、標高約16mの所に所在する。南北に2基が並んで検出されたが、共に東に開口する。北側がS F 01、南側がS F 02である。S F 01のすぐ北側には低湿地があるが、低湿地のすぐ近くに2基の窯が構築されている。低湿地は深さが1m以上あるが、上層では窯から出土するものと同型式の瓦や近世遺物が出土し、下層では遺物の出土がないため窯の構築時には既に低湿地が存在したものと考えられる。窯場での作業スペースを割いてまで、極力北側に窯を構築している理由は現在検討中であり、今後の課題としたい。

②構造 2基の窯はどちらも半地下式有牀平窯である。S F 01, 02は焼成室、燃烧室の規模・形状やロストルの形状・本数等の構造、また出土した瓦なども酷似し、同時期に操業されたと考えられる。以下ではS F 02のみを報告する。S F 02は焚口部分を欠くが、全長1.8m以上で、焼成室は長さ1.07m、幅1.05mを測る。焼成室は後世の削平を受けているため本来の高さは不明であるが、検出面からの深さはロストル上面までで45cmを測る。平面形はいびつな方形プランを呈するが、これは上半部で壁が崩落しているためであり、本来は下半部に見えるように整然とした方形である。ロストルは地山削り出しにより3本が作られており、上面の幅は10cm、床面からの高さ10cmである。ロストルは西側の奥壁に接する部分と東側の燃烧室寄りの部分は破損している。土層断面の観察によりロストルと床面は燃烧室の方に傾斜しており、その角度は同じ16°であることがわかる。また焼成室に堆積した土は上層の自然堆積土と下層の瓦片や焼土塊、炭を多量に含む土に大別できる。下層には黄褐色粘土が30cm×30cm×5cm程に面的に存在する部分があり、構築した天井の一部である可能性も考えられるが、全く被熱しておらず、その性格は不明である。燃烧室では地山を削り抜くことにより天井を形成している。天井部を取り外すと内部はT字状の平面形を呈しており、焚口側が細くくびれている。床面には深さ2cm程の溝があり、焚口の方へ向かってごく緩く傾斜している。排水に関わる遺構であろう。焚口については後世の削平を受け、樹根により攪乱されてもいるので本来の状況は不明である。しかし、燃烧室の東端部が焚口の至近部である可能性はある。それはこの部分が窯壁と床面の被熱部分が途切れる場所であり、また排水溝の途切れる部分でもあるからである。なお、この部分では30cm程の垂角礫が出土している。その性格については焚口の両脇に立て、焚口を構築した支柱石の可能性を考えている。その根拠として、礫は第76図に示した2点しか出土していないことと、出土位置から単なる混入とは考えにくいことが挙げられる。このような形態の焚口を持つ県内の類例としては平安時代の事例だが、高松市の片山池南2号瓦窯や、三豊郡高瀬町の二宮神社2号瓦窯等がある。なお、隔壁部では中央のロストル上に地山削り出しによる分炎柱を形成している。だが両端のロストル上では欠損しており、確認できなかった。

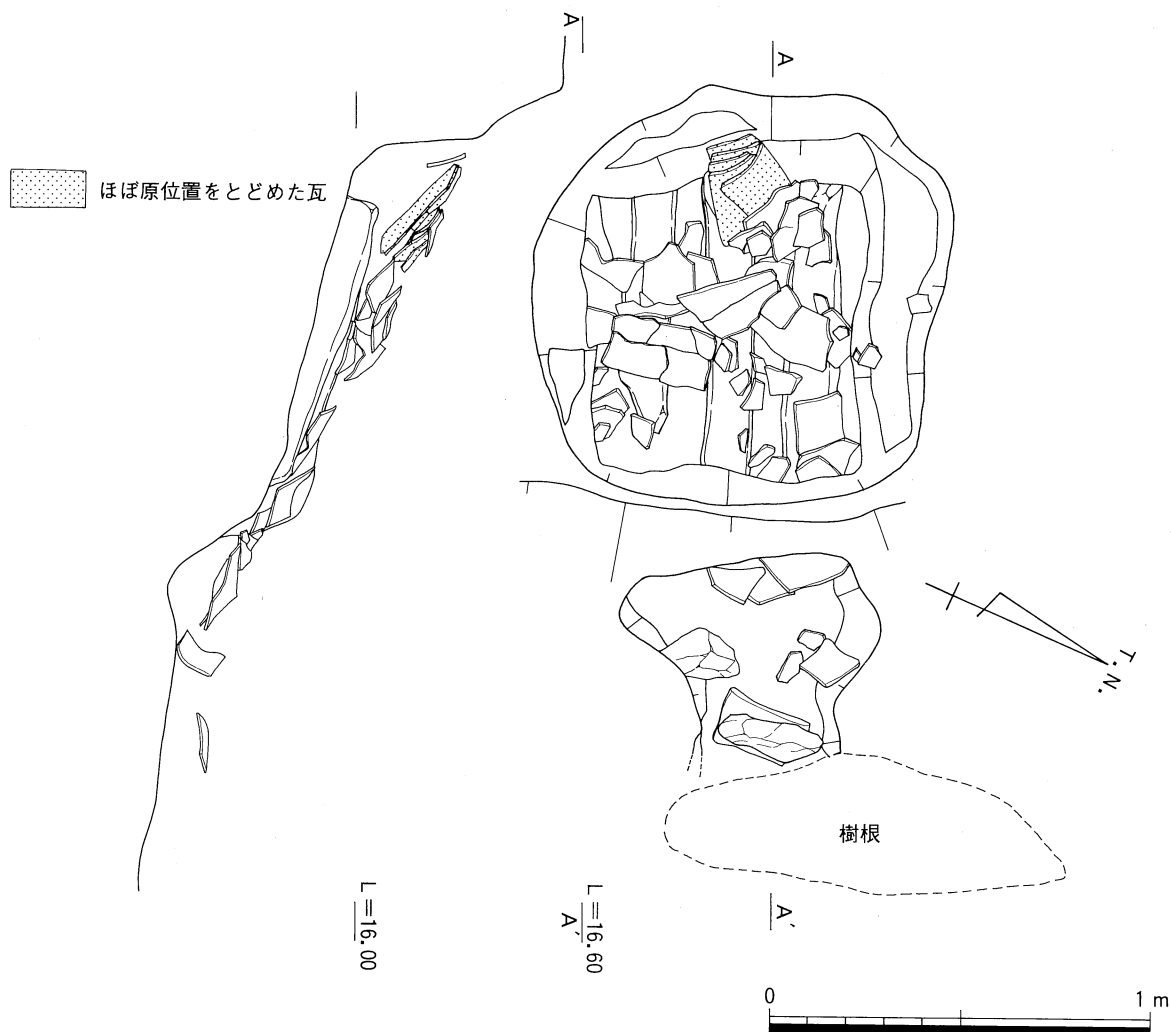
③被熱状況 焼成室の壁は大部分が赤褐色を呈し、酸化層が露出している。これは本来酸化層の上にあった還元層が剥落しているためで、還元層が確認できたのはごく一部のみであった。しかしロストルでは表面に還元層、内部に酸化層という層序が断ち割りにより確認できた。ただ、この還元層はS F 01で見られた青灰色よりかなり赤みがかっており、還元した後で酸化したような色調を呈していた。この理由については瓦の焼成中に密閉されていた窯が壊れ、焼成室に空気が入り込んだためではないかと考えている。この状況は窯出しされることなく、焼成室内に残された多量の瓦が出土していることと、それらのほとんどが赤褐色に酸化していることから裏付けられる。燃烧室も壁、床面共に赤褐色を呈し、酸化していた。これについても還元層が剥落し、旧状をとどめていないのであろう。

④瓦の焼成（遺物出土状況） 上述の通り、多量の瓦が焼成室の埋土の下層から出土しており、それら





の多くは赤褐色に酸化している。この赤褐色の瓦はいずれも平瓦であるが、出土状況から失敗作として窯出しされなかった瓦であることが明らかである。これらの平瓦のうち中央のロストルの西端部で5枚の平瓦が立て並べられて出土した。本来は直立させていたのだろうが、やや北東方向にずれて、傾いている。そのため瓦の北側の端はロストルから少しはみ出していた。だが、ロストル上面と瓦の下端との距離は2cmしかなく、ほぼ原位置を保っている。一般には2本のロストルをまたがせて瓦を置くようであるが、このような出土状況からSF02では少なくとも最終操業時の窯詰めにおいて平瓦を1本のロストル上に置いている。このような設置方法が常になされたか否かはわからないが、ロストルの上面の幅が10~12cmであるのに対し、平瓦の幅が15cmほどと大差ないためこのようなやり方でも安定して窯詰めできたのであろう。

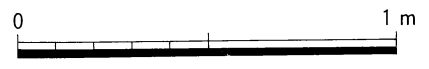
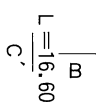
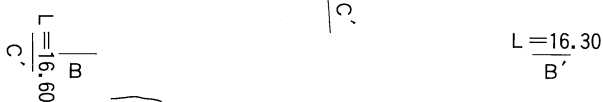
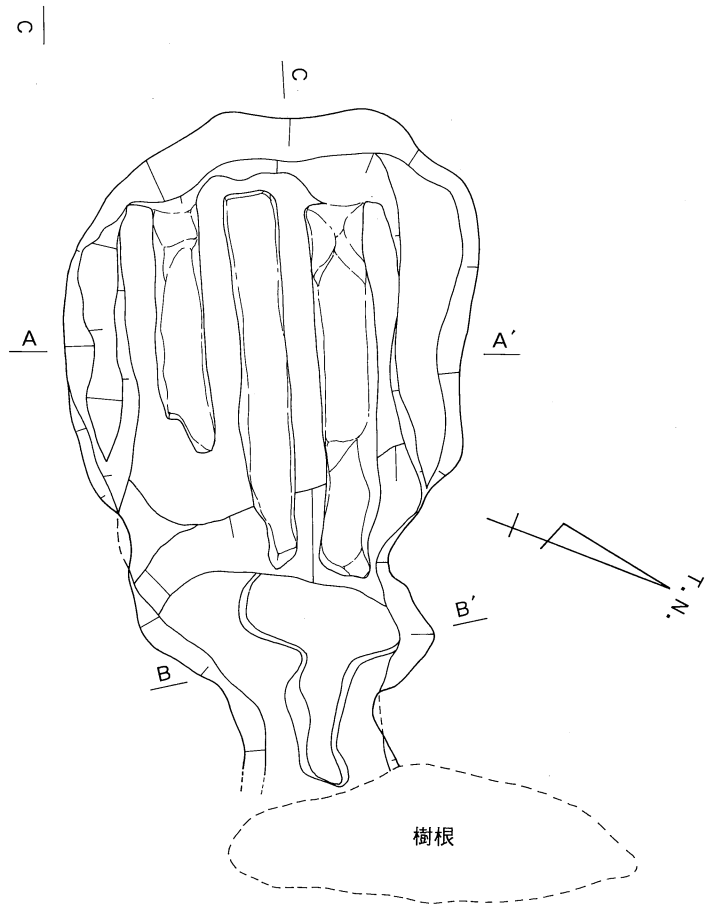
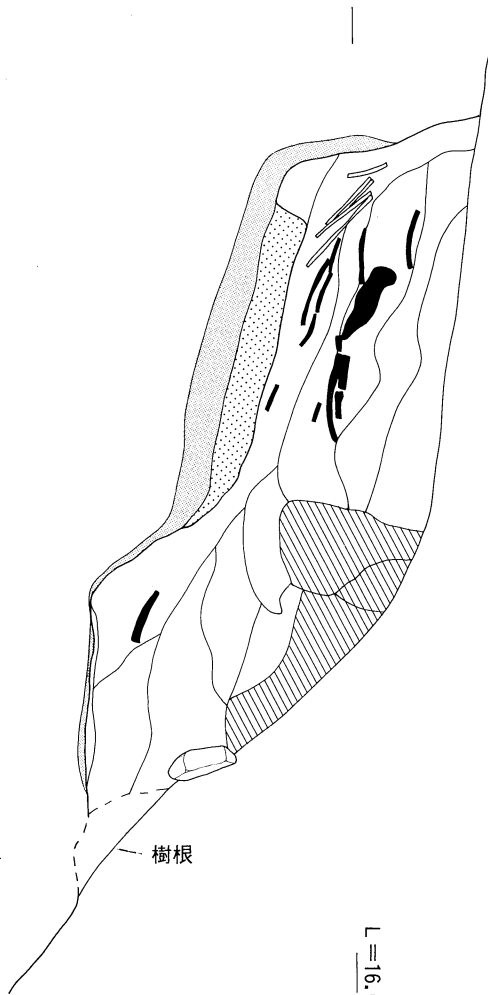
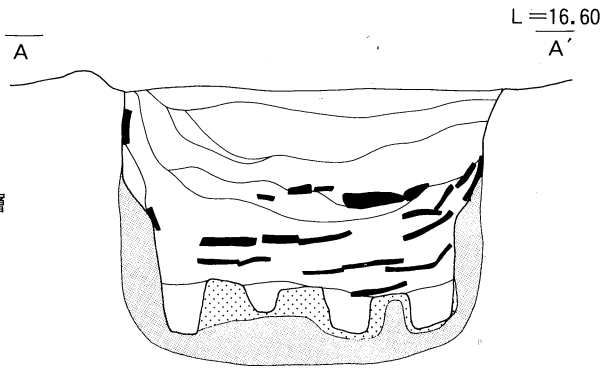
⑤出土遺物 多量の瓦が出土したが、多くは平瓦である。しかし、焚口付近では軒平瓦が1点出土した。1は瓦当面に連珠文を施す。

⑥時期 SF01, 02は長さが2m程度と小規模で、ロストルも3本しか持たない。過去の研究からこのような小規模な瓦窯は中世のものであることが指摘されている。また窯の時期決定に関わる遺物としては軒瓦(1~9)と土師器の杯(10~12)がある。これらはSF01, 02のみでなく、窯の操業で生じたゴミの廃棄土坑であるSK04, 12等からも出土している。SK04, 12と窯が密接に関わることは、これ



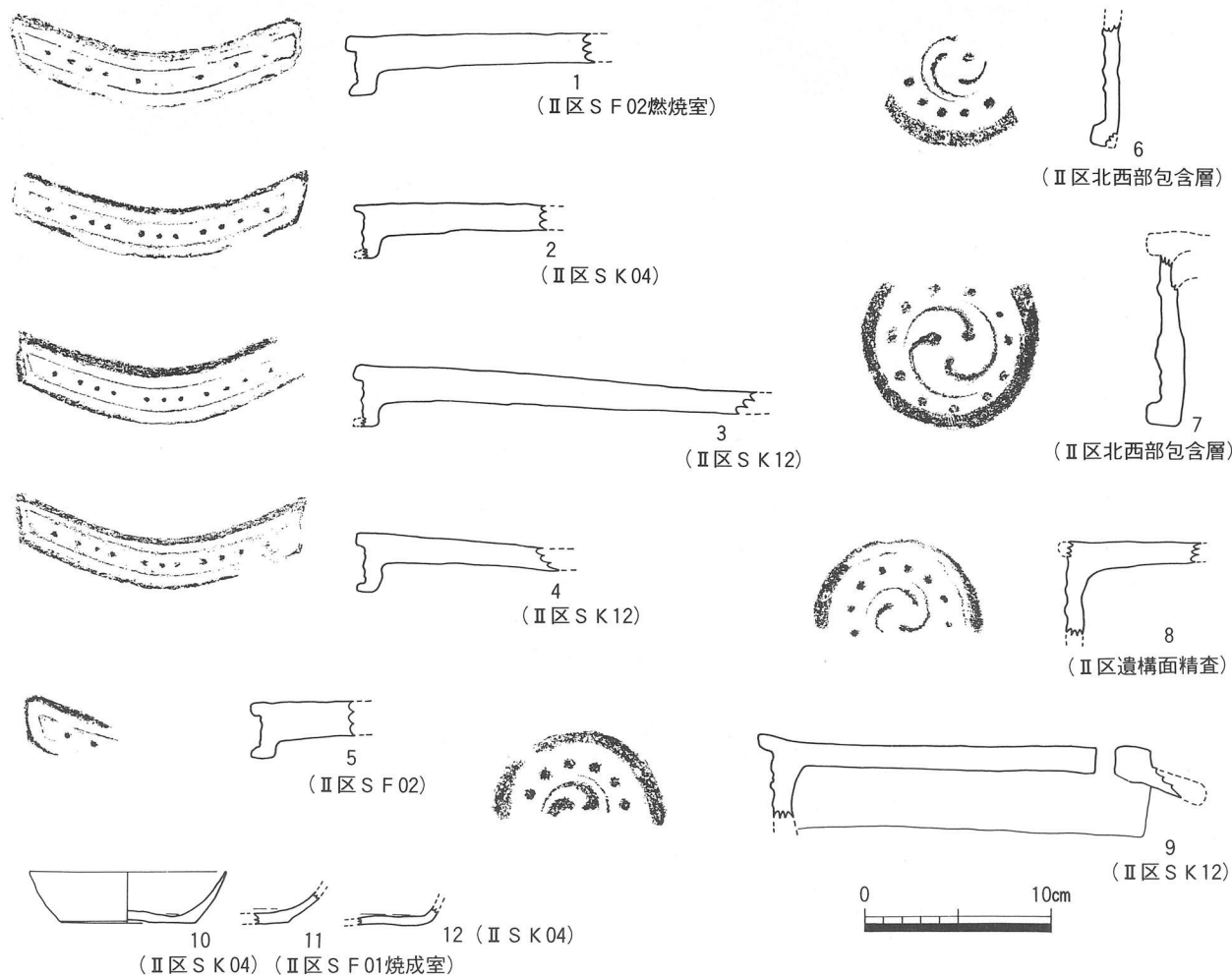
第76図 SF02 遺物出土状況 平・立面図(1/20)

-  中央ロストル（なお還元部を示す）
-  燃焼室天井部（被熱状況により分層しているが地山）
-  酸化
-  瓦



第77図 SF02 平・断面図 (1/20)

らの遺構で出土している軒平瓦の大きさが酷似し、瓦当に同じ数の連珠文を、同じ配置で施し、同型式であることから言える。S K12では軒丸瓦も出土しているが、香川県内の中世瓦の編年は未着手の状態であるので、ここでは実測図の呈示にとどめたい。一方、土師器の杯であるが、S F01の焼成室(11)とS K04(10, 12)で出土している。これらは中世前半に比定でき、S F01,02の操業時期がこの期間を含むと言える。



第78図 出土遺物実測図(1/4)



写真55 S F01, 02 遠景(北から)



写真56 S F01, 02 近景(東から)

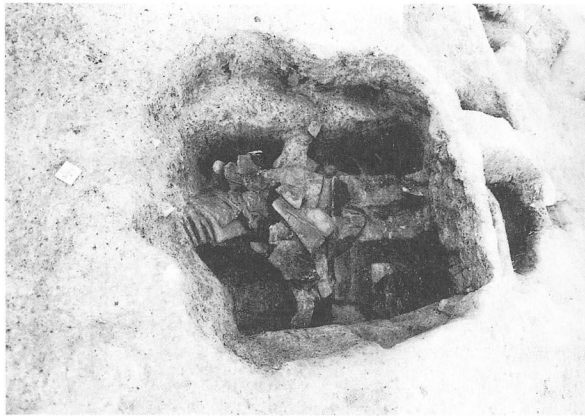


写真57 SF02 焼成室瓦出土状況(南から)

写真58 SF02 焼成室ロストル上瓦出土状況(南から)

SK04 調査区の中央で検出した土坑である。平面形は不整な長楕円形であり、断面形は浅い皿状を呈する。規模は南北6.6m、東西1.9mを測る。埋土中に多量の瓦を含み、SF01, 02の操業で生じた不良品の瓦等の廃棄土坑である。また瓦に混じって多量の拳大の礫を含んでいる。これらは全て地山に含まれる和泉系砂岩であり、地山内のものと大きさも似通っていることから土坑の掘削により生じた礫を埋め戻す際、一緒に放り込んだものであろう。



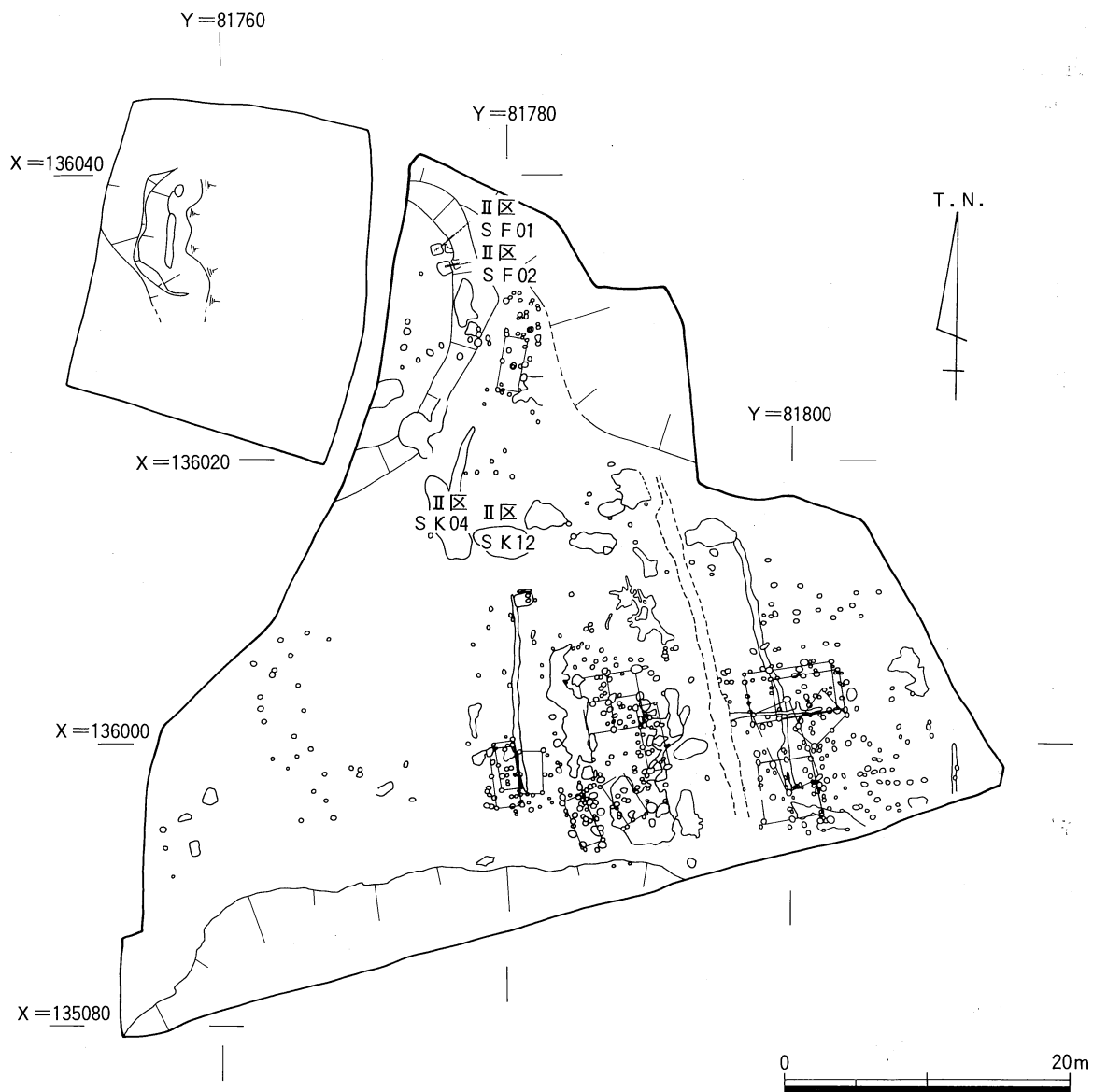
第79図 SK04 平・断面図 (1/60)

3. まとめ

天王谷遺跡では中世前半の2基の半地下式有林平窯と中世全般に及ぶ時期の集落を検出した。2基の瓦窯は配置、規模、構造等から同時期に操業された窯である。この内、SF02では窯詰めされた瓦の一部が窯出しされることなく放置されていた。この瓦群の内、一部はロストル上に設置した状況をほぼどめて出土しており、窯詰めの方法や一回の操業で焼ける瓦の枚数を考える上で、良好な資料となった。

遺跡は西側を山塊に、南側を深い谷に、北側、東側を低湿地に囲まれており、人が居住できる空間は昨年度、今年度に調査した部分にはほぼ限られる。また、天王谷遺跡の2つの瓦窯の存続時期には13C~14Cが含まれると考えており、中世全般に及ぶ遺跡の存続期間の中では早い時期に営まれている。よって、このように居住に適したとはいえない条件の土地を選択した理由として、瓦を焼くために工人が作った村である可能性もある。だが、これについては中世の山間の集落のあり方(規模や生業等)や、集

落景観の時期をおっての変遷と瓦窯との関わり、瓦の搬入先と輸送ルート等について、詳細な検討を行う中で結論づける問題であり、本報告での課題としたい。

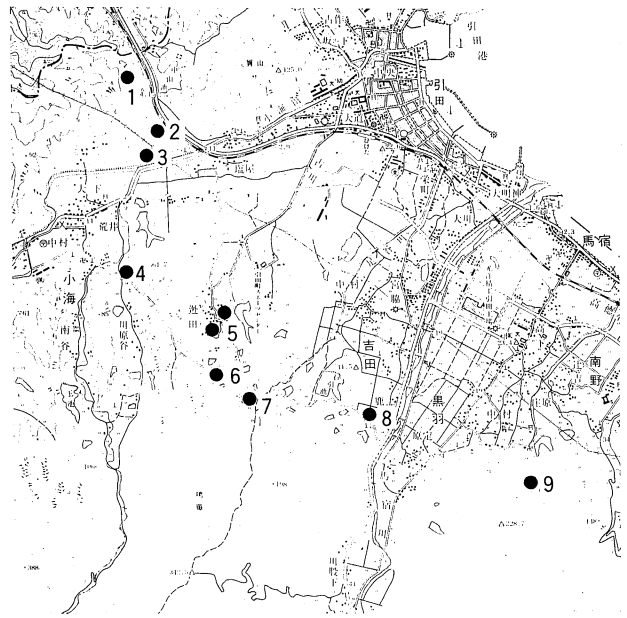


第80図 遺構配置図 (1/500)

迹田石垣遺跡

1. 立地と環境

迹田石垣遺跡は、大川郡引田町字迹田1122-1番地外に所在する。遺跡は阿讃山脈に連なる鳴嶽から北へ延びる丘陵裾部の緩斜面に位置するため標高は約22~25mと幅がある。遺跡は南側だけでなく、東側、西側も隣接する山塊に囲まれており、北側は南北に延びる小さな谷地形に面している。調査地は元々緩やかな傾斜地に立地しており、調査前までは水田耕作のために階段状にされていた。平成9年度より四国横断自動車道建設（津田～引田間）に伴い、引田町においてもかなり発掘調査が進んだ。引田町の遺跡としては、平成9年度に調査を行った庵の谷遺跡、平成10年度に調査を行った川北遺跡、天王谷遺跡等が挙げられるが、本遺跡と近接するものとしては昨年度に調査を実施し、中世の遺構を検出した迹田谷川下池遺跡が約300m程南東に所在する。さらにその東方には同じく昨年度に調査を実施し、鎌倉時代の掘立柱建物群を検出した鹿庭遺跡が所在する。また遺跡ではないが、天王谷地区では縄文時代の黒曜石製石鏃が、川原谷地区では中世の備前焼の納骨壺等が採取されており、周辺に時期を異にする遺跡が存在する可能性を示唆している。

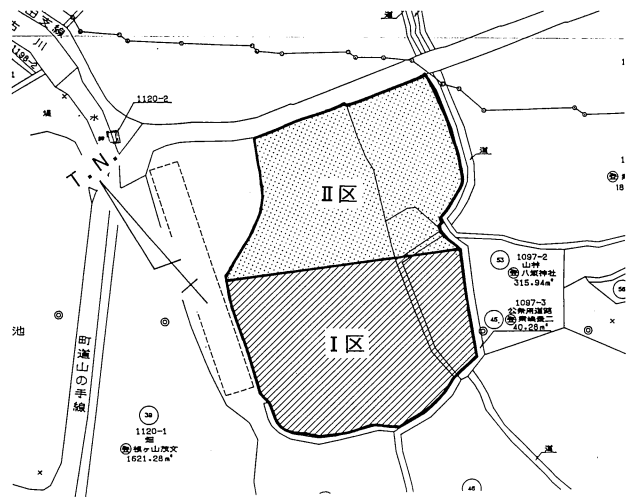


- | | |
|----------|-------------|
| 1. 天王谷遺跡 | 6. 迹田石垣遺跡 |
| 2. 天王谷地区 | 7. 迹田谷川下池遺跡 |
| 3. 川北遺跡 | 8. 鹿庭遺跡 |
| 4. 川原谷地区 | 9. 庵の谷遺跡 |
| 5. 迹田地区 | |

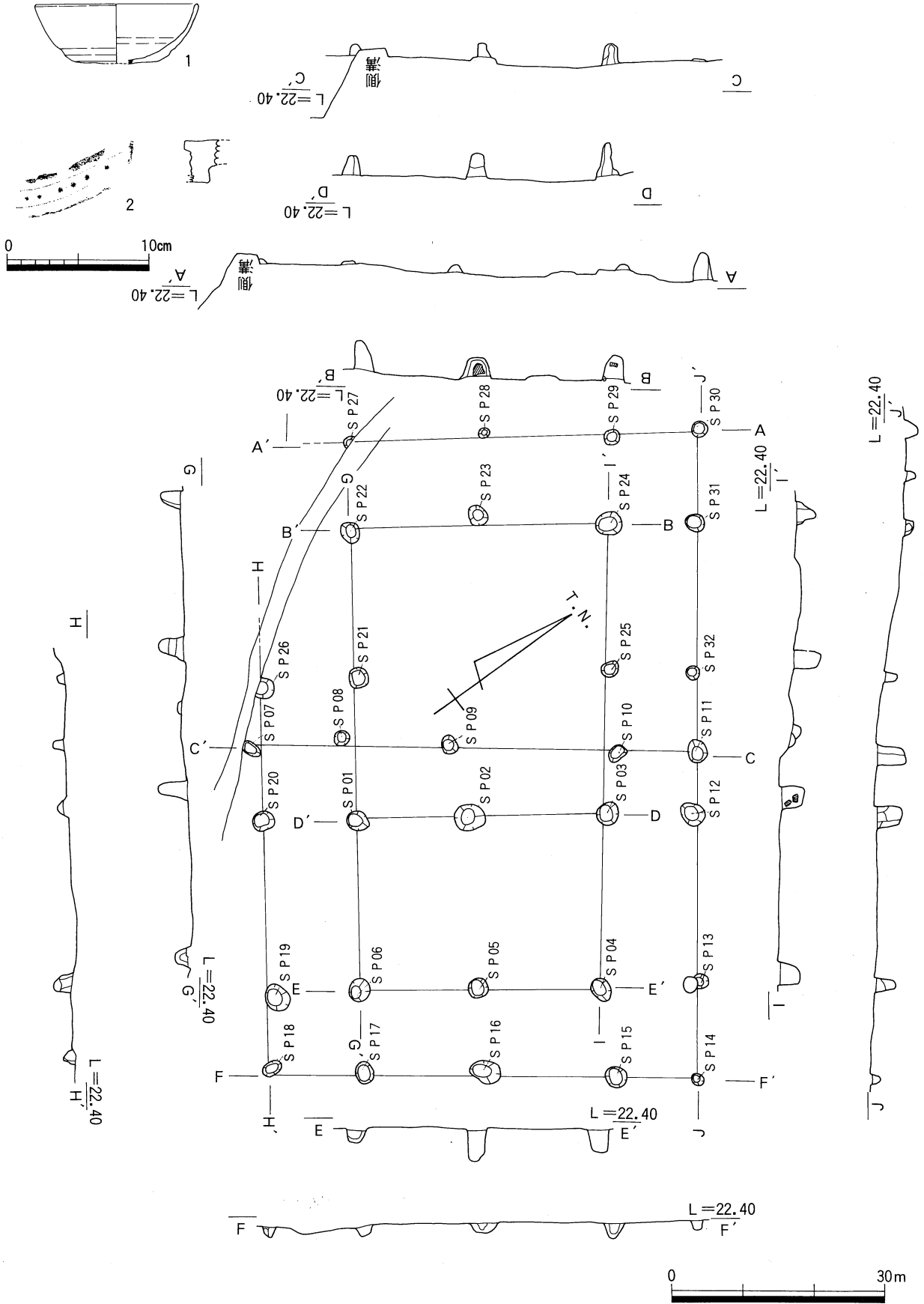
第81図 遺跡の位置及び周辺の遺跡 (1/50,000)

2. 調査の成果

迹田石垣遺跡の発掘調査は平成11年4月1日から6月30日まで行った。調査区は調査対象地の南側をI区、北側をII区とした。調査対象地を地理的に見ると、東側の丘陵とその裾部の緩斜面からなり、西へ向かって傾斜している。遺跡の旧状はほぼ全面が農地として利用されており、段状の平坦地に開削されていた。そのため旧地形の緩斜面の奥方向は削平の度合いが大きくなっている。遺構はほとんどがI区に集中しており、II区では極めて希薄な分布を示す。検出された遺構には中世の掘立柱建物群、池状遺構、土壇墓などがある。



第82図 調査区割図



第83図 SB01・02 平・断面図 (1/80) 及び出土遺物実測図 (1/4)

I区S B01・02 調査区の南西部で検出した掘立柱建物であり、どちらも四面庇である。S B01（構成するピットはS P01～20）はS B02（構成するピットはS P01, 03～06, 12～32）の東半部にあり、S B02と建物を構成する柱の多くを共有し、相互の柱穴間距離は類似する。この状況から、どちらかの建物がもう一方の建物へ連続して建て替えられたことが明らかである。すなわちS B01からS B02へ拡張されたか、S B02からS B01へ縮小されたかである。規模はS B01が梁行1間(3.0m)×桁行2間(4.2m)であり、S B02が梁行2間(4.2m)×桁行(7.8m)である。どちらも主軸方向はN-37°-Eである。出土遺物はS P04から土師器の杯(1)が出土している。1は箱形の器形を呈し、底部はヘラ切りされている。13Cに比定できる。

規模に関しては注目すべき点が2つある。1つめは四面庇の建物であるにも関わらず、極めて小さいことである。このことから庇ではなく、濡れ縁であり、仏教関係の建物であることが想定できる。これを裏付けるものとしてS B01・02のすぐ北側の包含層から出土した中世前半の軒平瓦1点(2)と後述するS X01から出土した平瓦3点がある。わずかな点数ではあるが、中世段階では瓦は一般集落において用いられるものではないとされており、出土位置からもS B01・02と関わるものであろう。2は連珠文を施しており、今年度の横断道概報に掲載している天王谷遺跡のロストル式瓦窯で作られた瓦と同型式である。2つめはS B01とS B02で梁行、桁行の柱間距離が類似しながらもそれぞれ違うことである。先述したS B01・02の建て替えの順序については出土遺物や掘立柱建物群の主軸方向と共に柱間距離にも注目して検討している。しかしながら現段階では把握できていないため、ここでは事実の指摘にとどめ、本報告までの課題としたい。

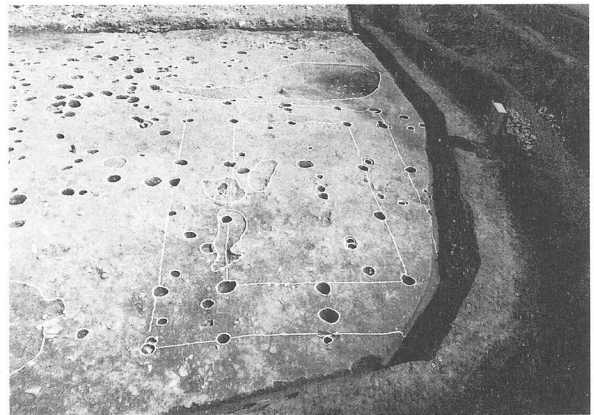


写真59 I区 S B01・02 全景(西から)

S T01 I区の北西部で検出した土壙墓である。長さ1.2m、幅85cm、深さ36cmを測り、長楕円形のプランをもつ。断面形は南北方向、東西方向共にU字形を呈する。墓とする根拠は埋土と出土遺物である。埋土は3層に分けられるが、いずれも地山に酷似しており、特に②層は地山がやや灰色暗く濁った土であり、一気に埋め戻されたことが伺える。出土遺物には鉄製の短刀と土師器の小皿(1)があり、短刀は墓壙の長軸に平行して置かれていた。このような出土状況から短刀と小皿はどちらも副葬品と考えられる。1は底部を糸切りしており、また、時期は13Cに比定できる。長軸の規模が1.2m前後で、長楕円形ないしは長方形プランをもつ同時期の墓は県内では綾歌郡綾歌町池下遺跡(13C)、高松市西打遺跡(13C)、大川郡津田町大山遺跡(12C末～13C初)、県外では徳島県板野郡板野町古城遺跡(12C末～13C初)、等で検出されている。出土人骨から埋葬姿勢が確認できた池下遺跡、西打遺跡では屈葬されているのでS T01についても遺体は屈葬されていたのであろう。また土壙の床面は南へ緩く傾斜し

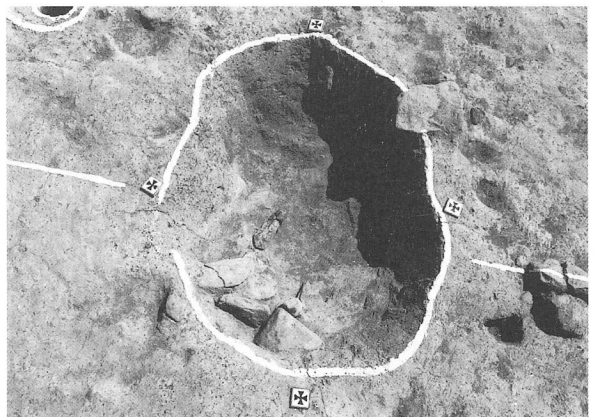
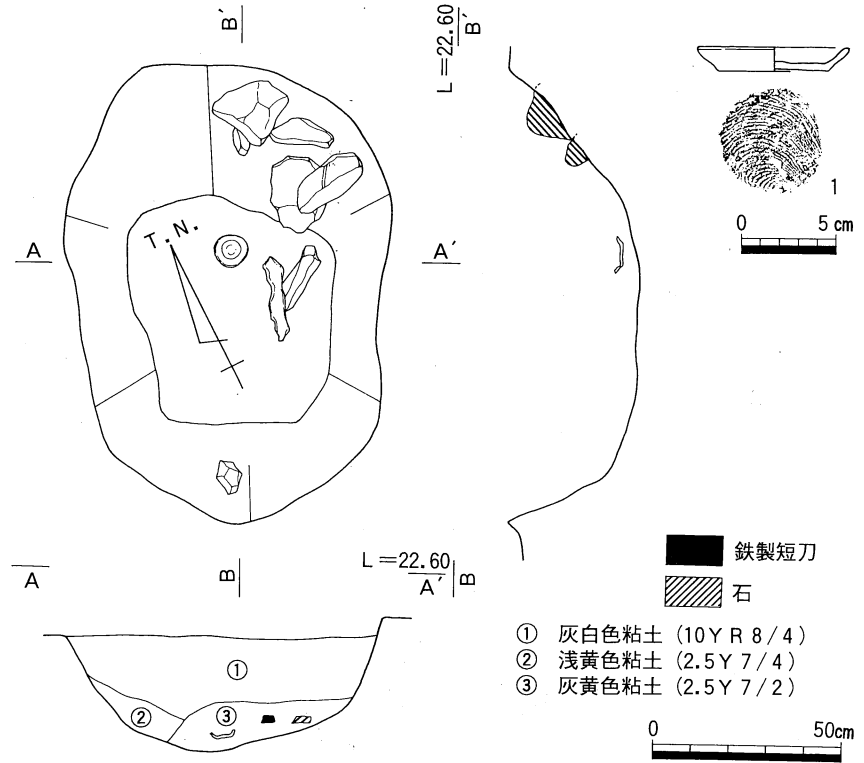


写真60 I区 S T01 完掘状況(北から)

ており、短刀の先端部も南を向いていることから頭位方向は北側であると推定できる。木棺については棺痕跡が検出できず、墓壙の断面形もU字形を呈するので使用していないと考えられる。

S X 01 S B 01・02の東側に接して検出した池状遺構である。長さ7.8m、最大幅3.2m、深さ35cmを測る。平面形はおたまじやくしのような形であり、断面形は浅い皿状を呈する。遺構内では北側に人頭大の礫が、南側に10cm弱の小振りの礫が密集して出土している。これらの礫は数点の砂岩と花崗岩を除くと全



て地山内に多く含まれる和泉系 砂岩である。礫の中には被熱しているものも数点ある。埋土は大きく2層に分けられるが、礫はどちらの層からも出土している。下層 (②, ②', ③, ④層) はベタベタした、極めて粘性が強い粘土であり、グライ化していることから水がたまった状態での堆積と考えられる。上層 (①, ⑤, ⑥層) は多くの遺構の埋土と同じ黒褐色系粘土である。

下層では炭化したイネ科植物の茎や葉の細片が多く混じる。またイネ科植物の根の痕跡と思われる長方形のマンガブロックが確認できる。これは滞水した土壌でイネ科植物が存在した場合に認められる痕跡であり、このことから下層の堆積は水がたまった状況下であったことが想定できる。

上層については遺構の埋め戻し土と礫であると考えられる。上層の上部では礫はほとんど見られず、下部から密集した出土状況を示しているので埋め戻しに際して、まず礫を投げ込み、地固めをしてから土を入れ、整地したのであろう。下層でも多量の礫が確認できたが、これらは埋め戻した際に放りこまれた礫が陥没したものと考えられる。

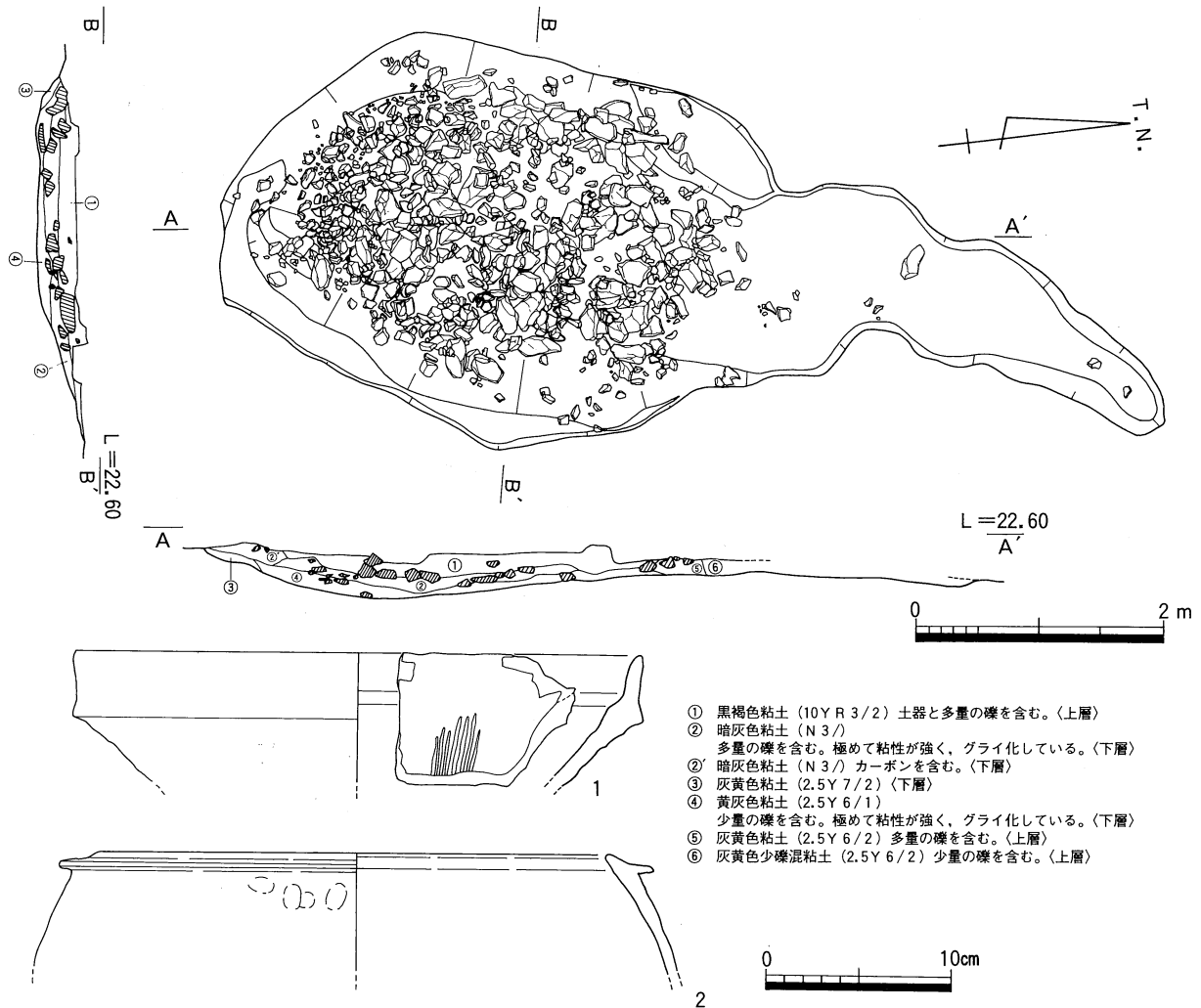
遺物は多くが、礫の間ないしは上層の土から出土しており、埋め戻された時期を示している。1は備前焼のすり鉢である。内部に7条の条溝を施す。2は土釜の口縁部である。体部に煤が付着している。時期は共に15Cである。

3. まとめ

迹田石垣遺跡では掘立柱建物14棟と池状遺構、土壙墓等を検出した。これらの遺構からの出土遺物は中世全般に及ぶが、主軸方向、柱間距離、出土遺物等から大きく3時期ほどに分けられそうである。そして掘立柱建物群の中にはS B 01・02と同時に存在したであろう数棟が含まれている。今後の課題としては、集落の時期的な変遷を追求する中でS B 01・02と同時併存した遺構のさらなる抽出とその具体的

な性格（例えば村落内寺院）の把握，そして，それが迹田石垣遺跡に造られた意義の検討が挙げられる。

また，土壙墓は先述したS T01以外にⅡ区においても2基ある。Ⅱ区のS T01・02はT字型に配置して造られており，その意図的な配置から近接した時期のものであると考えられる。規模は長さ約2m，幅約70cmを測る。断面形は逆台形を呈し，床面は平らである。この2基は規模から伸展葬と，形状からは木棺墓と考えられる。出土遺物はなかったが，Ⅱ区のS T01を切るピットから13Cの杯小片が出土していること，Ⅰ区S T01と主軸方向が一致すること，迹田石垣遺跡において最も古い出土遺物でも13Cを遡らないことから13C代のものと考えられる。よってⅠ区S T01とⅡ区S T01・02はさほど時期差がないと考えられるが，埋葬姿勢が屈葬と伸展葬，埋葬施設が直葬と木棺，副葬品をもつともたないという差がある。この差が示す意味について現段階では検討できておらず，今後の課題としたい。



第85図 S X01 平・断面図 (1/60) 及び出土土器実測図 (1/4)



第86図 遺構配置図 (1/400)

報 告 書 抄 録

ふりがな	しこくおうだんじどうしゃどうけんせつにとまなうまいぞうぶんかざいはくつちようさがいほう						
書名	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報						
副書名							
巻次		シリーズ名		シリーズ番号			
編著者名	長元茂樹・片桐孝浩・多田佳弘・蔵本晋司・宮崎哲治・増井泰弘・溝渕大輔・松岡宏一・野崎隆亨・信里芳紀・長井博志・多田 歩・糸山 晋・中山尚子・正山泰久・豊岡多恵						
編集機関	財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001-4						
発行機関名	香川県教育委員会・財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団四国支社・建設省四国地方建設局・香川県土木部						
発行年月日	2000年3月31日						
頁数	総頁数	目次等	本文	総表	挿図枚数	写真枚数	
	108	7	101	1	85	64	
ふりがな	ふりがな	コード	緯度・経度		調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町	遺跡	北緯			
はちまんいせき 八幡遺跡	かがわけんたかまつしだん 香川県高松市檀 紙町	37201		34° 18' 00"	134° 00' 00"	1999.7.1~ 1999.9.30 2000.1.1~ 2000.3.31	4,315m ²
なかもりいせき 中森遺跡	かがわけんたかまつしだん 香川県高松市檀 紙町	37201		34° 18' 10"	134° 00' 20"	1999.10.1~ 1999.12.31	1,563m ²
まえだひがし 前田東・ なかむらいせき 中村遺跡	かがわけんたかまつしだん 香川県高松市前 田東町	37201		34° 17' 40"	134° 07' 12"	1999.4.1~ 1999.6.30	1,900m ²
みどのでぐちいせき 三殿出口遺跡	かがわけんおおかわぐんおお 香川県大川郡大 ちちようみどの 内町三殿	37303		34° 14' 40"	134° 17' 55"	1999.4.1~ 1999.6.30 1999.11.1~ 1999.11.30	6,370m ²
こんびらやまいせき 金毘羅山遺跡	かがわけんおおかわぐんおお 香川県大川郡大 ちちようみずししもやしき 内町水主下屋敷	37303		34° 14' 02"	134° 19' 26"	1999.12.1~ 2000.3.31	1,300m ²
といぼないせき 樋端遺跡	かがわけんおおかわぐんしろ 香川県大川郡白 とりちようしろとりにしな 鳥町白鳥西藤井 寺前	37302		34° 13' 47"	134° 20' 25"	1999.9.1~ 1999.10.31	1,400m ²
なりしげいせき 成重遺跡	かがわけんおおかわぐんしろ 香川県大川郡白 とりちようしろとりなりしげ 鳥町白鳥成重	37302		34° 13' 41"	134° 20' 43"	1999.6.1~ 2000.3.31	4,192m ²
たにいせき 谷遺跡	かがわけんおおかわぐんしろ 香川県大川郡白 とりちようしろとりたに 鳥町白鳥谷	37302		34° 13' 39"	134° 21' 04"	1999.9.1~ 2000.3.31	2,741m ²
ぜんもんいけにし 善門池西遺跡	かがわけんおおかわぐんしろ 香川県大川郡白 とりちようしろとりたに 鳥町白鳥谷	37302		34° 13' 38"	134° 21' 09"	1999.7.1~ 1999.8.31	1,050m ²
てんのうだにいせき 天王谷遺跡	かがわけんおおかわぐんひけ 香川県大川郡引 たちちようひけたなかやま 田町引田中山	37301		34° 12' 33"	134° 23' 12"	1999.7.1~ 1999.8.31	1,475m ²
にげたいしがきいせき 辻田石垣遺跡	かがわけんおおかわぐんひけ 香川県大川郡引 たちちようひけたにげた 田町引田辻田	37301		34° 13' 30"	134° 23' 36"	1999.4.1~ 1999.6.30	2,300m ²

所収遺跡名	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八幡遺跡	室町時代	濠状遺構・条里溝	土師質土器・陶器	
中森遺跡	古墳時代	溝	須恵器	
	室町時代	掘立柱建物・溝	土師質土器・陶器	
前田東・中村遺	縄文時代～弥生時代	自然河川・溝状遺構	縄文土器・弥生土器・有舌尖頭器・磨製石斧	
	平安時代	溝状遺構・土坑・柱穴	須恵器・土師器・陶磁器	
	鎌倉時代	溝状遺構・土坑・柱穴・土壙墓	須恵器・土師器・陶磁器・鉄製品	
三殿出口遺跡	鎌倉時代～室町時代	掘立柱建物・土坑・柱穴	土師器・火葬墓	
	近世	溝・柱穴・砂糖竈・井戸	染付・瓦	
金毘羅山遺跡	弥生時代	土器棺墓・土壙墓・竪穴式石室		
樋端遺跡	弥生時代	土器棺墓・土壙墓	弥生土器・青銅鏡(破鏡)・鉄製品	
	古墳時代	古墳	鉄製品・ガラス玉	
成重遺跡	弥生時代中期	竪穴住居・掘立柱建物・溝・柱穴・土壙墓・集石状遺構・土器棺墓	弥生土器・石製品	
	弥生時代後期	竪穴住居・掘立柱建物・集石状遺構	弥生土器・石製品	
	鎌倉時代～室町時代	掘立柱建物・溝・土坑・柱穴	土師器・鉄器・銅銭・石製品	
	近世	砂糖竈・柱穴	染付・備前焼	
谷遺跡	弥生時代	竪穴住居・土坑	弥生土器・石器	
	鎌倉時代～室町時代	掘立柱建物・溝・土坑・柱穴	土師質土器・鉄器・銅銭	
善門池西遺跡	鎌倉時代～室町時代	溝・土坑・柱穴	土師器・陶磁器(瀬戸・美濃・備前・青磁・白磁等)	
天王谷遺跡	鎌倉時代～室町時代	掘立柱建物・土坑・柱穴・瓦窯	土師器・陶磁器・瓦	
	江戸時代末	溝・土坑	瓦	
迹田石垣遺跡	鎌倉時代～室町時代	掘立柱建物・土壙墓・池・溝・柱穴	土師器・陶磁器・鉄器	

四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報

平成11年度

平成12年3月31日

編集 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

発行 香川県埋蔵文化財研究会

印刷 成光社

本書は、著作権者の許可を得て香川県埋蔵文化財研究会が発行したものである。